

019496-000-1

特15-144

修証義

大内 青巒/著

M21.2

ABG-0222



洞上
在家
修
証
義
完

明治卅一年三月發行

曹洞扶宗會藏版

明治廿一年二月發行

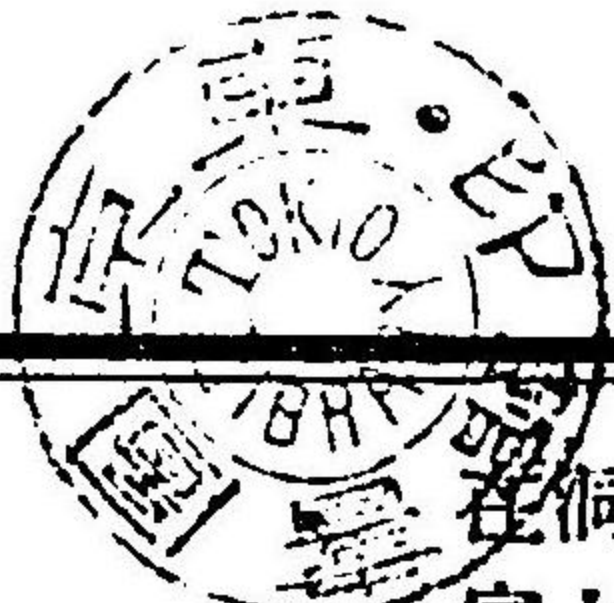
洞上
在家
修證義

完

版權所有

曹洞扶宗會藏版

No. 8891



同上
在家
修證義
并序

高祖大師曰く夫れ修證は一つに非すと思へ
 道の見あり佛道には修證これ一等あり今も證上の修
 あるか故に初心の辨道即ち本證の全體あり故に修行
 の用心を授るにも修の外に證を待つ思ひ無れと教ふ
 直指の本證あるか故ありと今夫れ懺悔は宿業を淨除
 し受戒は覺位に同入す直指の本證現前せざらんや發
 願して衆生を利益し日々の行持報恩に回向す通身の
 妙修現前せざらんや此修の外に證を求めす以て在家
 男女の辨道とあす謹て之を正法眼藏に質し恭く祖語



懺悔滅罪
 本證
 受戒入位
 發願利生
 妙修
 行持報恩

修證不二

○心念身儀發露白佛すへー發露の力罪根を去て銷殞せしむるなり
 ○受戒するか如きは三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり
 ○今生の命未だ過さる間に急きて發願すへー自未だ度らざる先に一切衆生を度さんと發願し營むなり
 ○報謝は餘外の法當るへからす日々の生命を等閑にせず私に費せらんと行持するなり

No 8891



同上
家修證義 并序

高祖大師曰く夫れ修證は一つに非すと思へ
 道の見あり佛道には修證これ一等あり今も證上の修
 あるか故に初心の辨道即ち本證の全體あり故に修行
 の用心を授るにも修の外に證を待つ思ひ無れと教ふ
 直指の本證あるか故ありと今夫れ懺悔は宿業を淨除
 し受戒は覺位に同入す直指の本證現前せざらんや發
 願して衆生を利益し日々の行持報恩に回向す通身の
 妙修現前せざらんや此修の外に證を求めす以て在家
 男女の辨道とかす謹て之を正法眼藏に質し恭く祖語



本證
 懺悔滅罪
 受戒入位
 發願利生
 妙修
 行持報恩

修證不二

○心も身も徹徹露白佛すへー發
 露の力業根を去て頓預せしむ
 るなり
 ○受戒するか如きは三世の諸
 佛の所證なる阿耨多羅三藐三
 菩提金剛不壞の佛果を證する
 なり
 ○今生の命未だ過さる間に急
 きて發願すへー自未だ度らざ
 る先に一切衆生を度さんと發
 願し誓ひなり
 ○報謝は餘外の法當るへから
 す日々生命を等閑にせず
 に現ざらんと行持するなり

を集めて一篇と成し名て洞上在家修證義と曰ふ悉く
典實あり苟くも一辭を私せず佛祖照鑑龍天加護

懺悔滅罪 受戒入位

發願利生 行持報恩

生第二節を明らめ死を明らむるは佛家の一大事因縁あり大凡第二節
因果の道理歷然として私おし造惡の者は墮し修善の者
は昇る毫釐も差はさるあり若し因果亡し虚しからんか
加きは諸佛の出世あるへからず祖師の西來あるへから
す人身得ること難し佛法値ふこと稀あり今我等宿善の
助くるに依て已に受け難き人身を受たるのみに非ず値

ひ難き佛法に値ひ奉れり最勝の善身を無常の風に任す
ること勿れ第四節つらく觀する所往事の再ひ逢ふべからざ
る多し紅顏いつくへか去りにし尋ねんとするに蹤跡な
し露命いかなる路の草にか落ちん塚間一堆の塵土あか
がちに惜むこと勿れあかがちに顧ること勿れ無常忽ち
に到るときは國王大臣親暱從僕妻子珍寶たすくる無し
唯獨り黃泉に赴くのみならず已に隨ひ行くは唯是れ善
惡業等のみあり人身第五節は四大五蘊因縁和合して假りに成
せり八苦つねに有り況や刹那第六節に生滅して更に留ま
らず此刹那生滅の道理に依て衆生乃ち善惡の業を造る

又刹那生滅の道理に依て衆生發心得道す此の如く生滅する人身惜むとも留まらず昔より惜みて留まれる一人未だ無し第六節善惡の報に三時あり一には順現報受二には順次生受三には順後次受これを三時と云ふ佛祖の道を修習するには其最初より此三時の業報の理を習ひ明らむるあり然あらざれば多く誤りて邪見に墮するあり唯邪見に墮するのみに非ず惡道に落ちて長時の苦を受く冥より冥に入る憐れむべし第七節今生遂に如來の眞訣を聞かす如來の正法を見ず如來の面授に照されず如來の佛心を使用せず如來の家風を聞ざる悲むべき一生あらん今生

の我身二つ無し三つ無し徒らに邪見に落ちて虚く惡業を感得せん惜からざらめや惡を造りながら惡に非すと思ひ惡の報あるへからすと邪思惟するに依て惡の報を感得せざるには非す

第八節佛祖あはれみの餘り廣大の慈門を開きけり一切衆生を證入せしめんが爲めなり人天誰れか入らざらん彼の三時の惡業報必ず感すへしと雖も懺悔するか如きは滅罪清淨あらしむるあり第九節大凡佛法に證入すること必ずしも人天の世智を以て出世の舟航とするには非す我心に善惡を分けて善と思ひ惡と思ふことを棄て、我身よか

らん我心ふにどあらんと思ふ心を忘れて善くもあれ悪くもあれ佛祖の言語行履に随ひ行くあり佛在世にも手惣に依て四果を證し袈裟を掛けて大道を明らめし俱に愚暗のやから痴狂の畜類あり唯正信の助くるところ惑を離るゝ道あり痴老の比丘の黙坐せしを見て設齋の信女さとりを開きし智に依らす文に依らす言を待たす語を待たす唯是れ正信に助けられたり第十節仰いて佛祖の證明を憑み誠心を専らして前佛に懺悔すへし恚麼するとき前佛に懺悔の功德力我を救ひて清淨らしむ此功德よく無礙の淨信精進を生長せしむるあり淨信一現すると

き自他同く轉せらるゝなり其利益普ねく情非情に蒙らしむ其大旨は。我昔所造諸惡業。皆由無始貪瞋痴。從身口意之所生。一切我今皆懺悔。是の如く懺悔すれば必ず佛祖の冥助あるあり心念身儀發露白佛すへし發露の力罪根を第十一節して銷殞せしむるあり第十二節既に佛祖の證明に依て身口意業を淨除して大清淨あることを得たり是れ則ち懺悔の力あり是の如く我に非ざる人身なりと雖も廻らして受戒するが如きは三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するあり誰の智人か欣求せざらん第十三節故に先づ佛法僧に歸

依し奉るへし佛弟子とあること必ず三歸に依る孰れの戒を受るも必ず三歸を受けて其後に諸戒を受るあり然あれは則ち三歸に依て得戒するあり第十三節此歸依佛法僧の功德必ず感應同交するとき成就するあり天上人間地獄鬼畜ありと云ふとも感應同交すれば必ず歸依し奉るあり已に歸依し奉るときは生々世々在々處々に增長し必ず阿耨多羅三藐三菩提を成就するあり知るへし三歸の功德其れ甚深無量なりと云ふこと第十四節一佛の名號を稱念せんよりは速に三歸を受け奉るへし生をかへ身をかへても三寶を供養し敬ひ奉らんことを願ふべし寐ても覺めても

三寶の功德を思ひ奉るへし寐ても覺めても南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧と稱へ奉るへし是れ諸佛菩薩の行はせたまふ道なり之を深く法を悟るとも云ふ佛道の身に具はるとも云ふなり更に異念を雜へざらんと願ふへし第十五節徒らに所迫を畏れて山神鬼神等に歸依し或は外道の制多に歸依すること勿れ彼れば其歸依に因て衆苦を解脱すること無し第十六節次に三聚戒あり攝律儀戒攝善法戒攝衆生戒あり次に十重禁戒あり第一不殺生戒第二不偷盜戒第三不邪淫戒第四不妄語戒第五不酤酒戒第六不說過戒第七不讚毀自他戒第八不慳法財戒第九不瞋恚戒第十

不謗三寶戒あり此十六條の佛戒は諸佛の護持したまふ所なり佛々相授あり祖々相傳あり法に依り教に隨ひ或は禮受し或は拜受せよ第十七節衆生受佛戒即入諸佛位位同大覺了眞是諸佛子あり諸惡莫作と願ひ諸惡莫作と行ひもてゆく諸惡つくられず成りゆく所に修行力忽ちに現成す此現成は盡地盡界盡時盡法を量として現成するあり第十八節是時十方法界の土地艸木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て其起す所の風水の利益に預かる輩皆甚深不可思議の佛化に冥資せられて近き悟を顯はす此水火を受用する類皆本證の佛化を周旋するか故に是等の類と共住して同語

する者亦た悉く相互ひに無窮の佛徳そふはり展轉廣作して無盡無間斷不可思議不可稱量の佛法を遍法界の内第九節外に流通する者あり我等幸ひに一分の妙修を單傳せる即ち一分の本證を無爲の地に得るあり從來の光陰は設ひ虚く過すとも今生の命未た過ぎざる間に急ぎて發願すへし自未た度らざる先に一切衆生を度さんと發願し營むかり設ひ在家にもあれ出家にもあれ或は天上にもあれ人間にもあれ苦に在りといふとも樂に在りといふとも早く自未得度先度他の心を發すへし第二十節其形卑しといふとも此心を發せば

已に一切衆生の導師あり設ひ七歳の女流なりとも即ち
 四衆の導師なり衆生の慈父あり男女を論すること勿れ
 是れ佛道極妙の法則あり第二十一節若し菩提心を發して後に六趣
 四生に輪轉すといふとも其輪轉の因縁皆菩提の行願と
 ある生死を心に任す生死を身に任す生死を道に任す生
 死を生死に任す刹那生滅流轉捷疾にありあがらも久遠
 の壽量忽ちに現在前するあり第二十二節何れの處か佛國土にあら
 ざらん此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきあ
 り願生此娑婆國土し來れり見釋迦牟尼佛を歡はざらん
 や第二十三節初發心に成佛す妙覺地に成佛す或は無量劫行ひて衆

生を先に度して自らは遂に佛に成らす唯衆生を度して
 衆生を利益するも有り設ひ佛に成るへき功德熟して圓
 滿すへしといふとも尙ほ廻らして衆生の成佛得道に廻
 向するあり第二十四節衆生を利益すといふは布施愛語利行同事は
 薩埵の行願あり布施といふは不貪あり一錢一艸をも布
 施すへし此世他世の善根を莖す法も財あるべし財も法
 あるべし唯彼れが報謝を貪ほらず自が力を分つあり舟
 を置き橋を渡すも布施の檀度あり治生産業もとより布
 施に非ざること無し自が所作ありといへとも靜かに隨
 喜すべきあり諸佛の一つの功德を已に單傳し作れるが

故に菩薩の一法を始て修行するが故に第二十五節愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し顧愛の言語を施すあり慈念衆生猶如赤子の念を貯へて言語するは愛語あり怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり向ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂くす向はずして愛語を聞くは肝に銘し魂に銘す愛語よく回天の力あることを學すべきあり第二十六節利行といふは貴賤の衆生にかきて利益の善巧を廻らすあり譬へは窮龜を慫み病雀を養ふ窮龜を見病雀を見しとき彼れが報謝を求めす唯偏へに利行に催はさるゝあり第二十七節同事といふは不違なり

自にも不違あり他にも不違あり海の水を辭せざるは同事あり是故に能く水聚りて海と成る明主は人を厭はざるか故に其衆を成す人を厭はずと雖も賞罰あきには非す賞罰ありと雖も人を厭ふこと無し唯應に柔ある容顏を以て一切に向ふへし

第二十八節無上菩提を演説する師に値はんには種姓を觀すること勿れ容顏を視ること勿れ非を嫌ふこと勿れ行を輕んずること勿れ唯般若を尊重するか故に第二十九節況や今の見佛聞法は佛々面々の行持より來れる慈恩あり佛祖若し單傳せずは如何してか今日に到らん一句の恩おは報謝すへし

一法の恩おは報謝すへし況や如來無上の正法を見聞する大恩誰れの人面か忘るゝときあらん世人の情ある金銀珍玩の蒙惠おは報謝す好語好聲のよしみ心あるは皆報謝の情を勵む病雀おは恩を忘れす三府の環よく報謝あり窮龜おは恩を忘れす餘不の印よく報謝あり人類いかでか恩を知らざらん第三十節其報謝は餘外の法は當るべからず唯應に日々の行持其報謝の正道あるへし謂ゆるの道理は日々の生命を等閑にせず私に費さゞらんと行持するなり第三十一節百丈禪師已に年老臘高あり尙は普請作務の處に壯齡と同く勵力す衆これを傷む人これを憐れむ師やま

ざるなり遂に作務のとき作務の具を隠して師に與へざりしかは師其日一日不食なり衆の作務に加はらざることを憾むる意旨あり之を百丈の一日不作一日不食の蹤といふ第三十二節百千萬劫同生同死の中に行持ある一日は髻中の明珠なり喜ふへき一日あり徒らに百歳生けらんは憾むへき日月なり哀むへき形骸なり設ひ百歳の日月は聲色の奴婢と馳走するとも其中の一日の行持を行取せば一生の百歳を行取するのみに非ず百歳の他生をも度取すへきなり此一日の身命は尊ふへき身命あり尊ふへき形骸かり草露の命を徒らに零落せしめず如山の徳を懇ろ

に報すへし是れ則ち行持あり愈々の道理必然なり
の傳道受業是の如し修因得果是の如し

在洞家上 修證義 終

明治二十年十二月二十四日版權免許

同二十一年二月二十日印刷

同二十一年二月二十二日出版

著作者兼發行者

大内青巒

東京麻布區北日ヶ窪町
貳番地

印刷者

島連太郎

東京京橋區西紺屋町
廿六番地寄留

發賣所

鴻盟社

東京麻布區北日ヶ窪町
貳番地

定價金五錢

に報すへし是れ則ち行持あり恁麼の道理必然なり一
の傳道受業是の如し修因得果是の如し

在洞家上 修證義 終

明治二十年十二月二十四日版權免許

同 二十一年二月二十日印

同 二十一年二月二十二日出

著作者兼發行者

刷 版

定價金五錢

大 内 青 巒

東京麻布區北日夕窪町
貳番地

印 刷 者 島 連 太 郎

東京京橋區西紺屋町
廿六番地寄留

發 賣 所 鴻 盟 社

東京麻布區北日夕窪町
貳番地

